

Title	1 : 東京歯科大学水道橋病院歯科麻酔科外来における 麻酔管理症例の分析
Author(s)	齋藤, 菜月; 久木留, 宏和; 小崎, 芳彦; 矢崎, 龍彦; 松永, 真由美; 齋藤, 絢香; 吉田, 香織; 半田, 俊之; 松浦, 信幸; 一戸, 達也
Journal	歯科学報, 119(5): 448-448
URL	http://hdl.handle.net/10130/5012
Right	
Description	

口 演

No.1 : 東京歯科大学水道橋病院歯科麻酔科外来における麻酔管理症例の分析

齋藤菜月, 久木留宏和, 小崎芳彦, 矢崎龍彦, 松永真由美, 齋藤絢香, 吉田香織, 半田俊之,
松浦信幸, 一戸達也 (東歯大・歯麻)

目的 : 2018年4月~2019年3月の1年間の東京歯科大学水道橋病院歯科麻酔科外来における全身管理症例を調査し, 年次比較を行った。

方法 : 2018年4月~2019年3月までの1年間に, 東京歯科大学水道橋病院歯科麻酔科外来を受診した症例を対象に, 症例数, 性別, 年齢, 管理方法について後ろ向きに調査した。本研究は東京歯科大学倫理審査委員会の承認を得て行った (承認番号952)。

結果および考察 : 総症例数は8,223症例であり, 男性39%, 女性61%であった。年齢分布は, 40~49歳が636名 (20%) と最も多く, 次いで20~29歳が581名 (19%) であった。月別での症例数の比較では, 7月が741例 (10%) と最も多かった。当科の専門外来であるリラックス歯科治療外来の症例数は4,594例であった。麻酔管理を行った理由として最も多かったのは, 歯科恐怖症 (3,252例) であり, ついで, 異常絞扼反射 (2,480例), 医科基礎疾患合併 (1,420例) の順であった。管理方法の内訳では静脈麻酔を含む静脈内鎮静法4,576例 (87%) であり, 全身麻酔症例は221例 (4%) であった。静脈

内鎮静法での使用薬物は, ミダゾラムとプロポフォールとの併用が最も多かった (3,509例)。これは, 重度の歯科恐怖症や, 異常絞扼反射を合併する患者は, 両薬剤の併用が必要となるためと考えられる。歯科麻酔科外来における全身麻酔のうち日帰り全身麻酔症例は, 168例 (76%) であった。治療内容の内訳は, 抜歯術, 嚢胞摘出術, 腫瘍切除術を含む口腔外科小手術症例が最も多く (180例), そのうち正中過剰埋伏歯の抜歯術が最も多かった。日帰り全身麻酔のうち, 18歳未満は117例 (53%) であり, 若年者が多い傾向であった。これは, 小児の正中過剰埋伏歯の抜歯術や, 小児の齶蝕治療が多いためと考えられる。また障害者の日帰り全身麻酔症例は全体の26%であった。東京都内に特定機能病院は多いが, 障害者に対する全身麻酔下歯科治療を受け入れる病院は比較的少なく, 当科への依頼も増加傾向にある。需要の増加に応じ, 障害者が安全, 快適に受診できるよう, 当科でも診療体制の改善をしていく予定である。

No.2 : 東京歯科大学水道橋病院手術室における麻酔管理症例の検討

神保泰弘, 久木留宏和, 石崎元樹, 小崎芳彦, 井上博之, 小林彩香, 吉田香織, 半田俊之,
松浦信幸, 一戸達也 (東歯大・歯麻)

目的 : 2018年4月から2019年3月までの1年間における, 東京歯科大学水道橋病院手術室の麻酔管理症例を分析し検討したので報告する。本調査は東京歯科大学倫理委員会の承認を得て行った (承認番号953)。

方法 : 2018年4月~2019年3月までの1年間において, 東京歯科大学水道橋病院手術室の麻酔管理症例を対象とし, 症例数, 性別, 年齢, 麻酔時間, 術式, 麻酔法, 気管挿管方法, 出血量, 既往歴および術中・術後合併症を分析し検討した。

結果および考察 : 総症例数は553症例 (全身麻酔症例551例, 局所麻酔症例2例) であった。性別は男性199名 (36%), 女性354名 (64%) であった。年齢分布は20~29歳が194名 (34%) で最多であった。麻酔時間は1時間以上2時間未満が最多であった (31%)。手術内容は顎変形症手術が最多であり (46%), 顎変形症術後のプレート除去術を含めると全体の63%を占めていた。顎変形症手術を受けた患者の平均年齢は28.6歳であり, うち72%が女性であった。全身麻酔法はプロポフォールによる全静脈

麻酔法が最も多く (53%), 次いでデスフルランによる吸入麻酔法が多かった (38%)。全静脈麻酔法の症例の74%が女性であり, そのうち92%が50歳以下であった。50歳以下の非喫煙女性患者では全身麻酔後に術後悪心嘔吐 (PONV) 発症のリスクが高いため, そのリスクを軽減する目的で全静脈麻酔法が多く選択されたと考えられる。出血量は100 mL 未満が最多であった (66%)。医科疾患を合併した患者は123例 (うち高齢者は15例) で, 気管支喘息が最も多く, 次いで高血圧症が多かった。術中合併症の発生は, 収縮期血圧80 mmHg 未満となる血圧低下が最も多かった。重篤な術後合併症は, 胸水貯留による呼吸不全1件であった。気管挿管方法は, Macintosh型喉頭鏡の使用が437例で全体の80%を占め, 次いでビデオ喉頭鏡の使用が71例 (13%) であった。ビデオ喉頭鏡による気管挿管は, 小下顎症など気管挿管が困難な患者に選択される。Macintosh型喉頭鏡と比較して気管挿管の成功率を高め, 歯や口腔粘膜の損傷のリスクも低いため, 今後使用頻度が増加していくと考えられる。